

ChatGPT にパロディーを講評して貰いました

<https://chatgpt.com/>

ChatGPT

お手伝いできることはありますか？

「夕鶴」のパロディーを書いてみました。少し長いですが忌憚の無い評価を戴けますでしょうか。

ChatGPT

もちろんです！ぜひパロディーをお聞かせください。精一杯、具体的かつ正直なフィードバックをいたします。

「夕鶴」オリジナル

昔、与ひょう、と言う名のお百姓が、罌に掛かった鶴を助けました。

その晩、与ひょうの家に、つう、という女性が訪ねて来ました。

行くところが無いと云うので、暫くおいてあげる事にしました。

お礼に、そのつうと云う女性は、綺麗な織物を織ってくれ、それが結構良い値で売れたので、与ひょうの暮らし向きは随分良くなりました。

それに目をつけた、強欲な村民 2 名が、与ひょうをそそのかしてもっと沢山の織物を織らせる様に迫りました。

与ひょうは、つうが織物を織るにつれ次第にやつれていくのを心配してそれを断り続けていました。

はた織りしているところを見てはいけないと言われていたので、余計に心配でなりません。

与ひょうが応じないので、しびれを切らした強欲な 2 名は、見てはいけないと言われてはた織り場を覗いてしまいました。

つうは、人間ではないことがばれてしまった事を悟りました。

これ以上ここには居られないので急いで去らなければならないと、織物を織る手を速めました。

実は、自分の羽根を引き抜いて織り込んでいたのですが、急いで引き抜く為手加減をする余裕が無くいつもより激痛が走りますが、それでも織り上げるまで耐え続けました。

明け方、織り上がったばかりの 2 反の反物を持ったつうが、与ひょうの前に現れ、助けて貰ったお礼に人間の姿に身をやつしたあるとき罌から助けられた鶴であることを打ち明けました。

そして、鶴であることが知られてしまった今、おいとま乞いをしなければならぬ事を言い残し、名残惜しげに飛び去ってしまいました。

「鶴であってもかまわない、おつうはおつうだ」と、叫び呼び掛けてもその悲痛な呼び声は空しく東の空に吸い込まれ後には、つうが必死で織り上げた、反物が与ひょうの腕の中に残りました。

無理をして羽根を抜いた為でしょう、うっすらと緋色に染まったつうの最後の作品でした。

おしまい

と言うのが昔話の、「鶴の恩返し」を戯曲にした「夕鶴」ですが、やたら悲しくてやりきれない気持ちばかりが残り、精神衛生上良くないですね。

そこで稚拙を厭わず、別の切り口からこのタイプの逸話を、自分なりに読み解いてみましょう。

「夕鶴」パロディー 「くノ一」が与ひょうに押し掛け女房

「くノ一が与ひょうに押し掛け女房」1

昔、忍者が諜報活動する場合、「里隠れ」という忍法がありました。

目的の地でよそ者と警戒されない最善の方法はその地で信頼されている者の女房になりその地にとけ込むことです。

その任務を指示された女忍者「くノ一」は、押し掛け女房になる相手を物色し、一人の正直そうな農民に目をつけました。

その「くノ一」は、一羽の鶴を罾に掛かった状態でその農民に見つかりやすい場所に仕掛けました。

それを見つけたその農民は、罾から鶴を解放して逃がしてくれました。

もし、これが悪い人間なら、これ幸いとその鶴を持ち帰り食ってしまうのが関の山だったでしょう。

こうして、この農民、与ひょうは、押し掛け女房の相手として見込まれてしまいました。

その日の夜更け、この「くノ一」は、寒い夜道に行き倒れ直前の哀れな女、「つう」を演じる事になります。

つづく

「くノ一が与ひょうに押し掛け女房」2

与ひょうの家は、農家でも旧家でしたから、かなり大きな造作で納屋の奥に、はた織場が在り、そこに以前使っていた、はた織り機が有ることもこのくノ一は調べて既に知っていました。

そう言った条件と、何より与ひょうが、律儀であること、両親が亡くなって久

しく一人住まいをしていることが、与ひょうの押し掛け女房になった理由でした。

行き倒れから救われた女は、名を「つう」と名のりました。

明るく朝、朝御飯の用意を済ませ与ひょうに美味しく食べて貰い、改めて行き倒れから救って貰ったお礼を述べ、御礼に布を織らせて頂けるか、はた織機が在れば使わせて頂けるかを尋ねました。

快く承諾され「つう」は納屋の奥の小部屋で作業を開始しました。

家事の為に出てくる以外はその織場で、休むことなく織機の音をカタン、カタンとさせていました。

ただし、作業中は絶対覗かないことの約束を取りつけその日から昼も夜もはた織機の音だけが「つう」がそこにいることを知らせてくれていました。

つづく

「くノ一が与ひょうに押し掛け女房」3

「つう」は、家事は完璧にやりながら寸暇を見つけては納屋の奥の小部屋ではた織りをやりました。

はた織しているところは決して覗き見してはいけないので、織機の音だけが「つう」が元気に作業している気配を示してくれ、与ひょうは安心して野良に山に仕事に出かける毎日が続きました。

「つう」が織り上げた織物は、町に持って行くと良い値で売れました。

もともと、与ひょうは欲のない人間でしたから村に帰るとき子供の喜びそうなお土産を近所の子供たちに買って帰ったりしていました。

この子供たちは、いつの間にか「つう」に「あそんでけれ」と懐いていましたので、与ひょうも可愛がっていたという訳です。

「つう」が子供たちと、「鹿鹿角何本？」という遊びをしているのを目を細めてみていた与ひょうとは別に、近くの物陰から狡猾そうな濁った眼の2人の男がこの光景を盗み見していました。

同じ村の衆でまんざら知らない仲ではないので堂々と出て来ればよさそうなものですが、何か悪だくみをしている後ろめたさからか、卑屈な態度で怪しい雰囲気のにじませています。

つづく

「くノ一が与ひょうに押し掛け女房」4

これら悪玉2人は、与ひょうの金回りが急に良くなったので探っていたのです。そして、「つう」という押し掛け女房が織り上げた反物が、良い値で売れるためである事を知ってしまいます。

直ぐに、悪知恵を働かせ、反物をもっと高く売ってやるから自分たちにまかせてみないか、と与ひょうに持ち掛けました。

もともと金に執着しない与ひょうでしたから、初めはあっさりとは断っていましたが、強欲な2人は毎日しつこく食い下がりとうとう半ば無理やり反物を奪うように預かり町に売りに行き与ひょうが売っている何倍もの値段で売れることを知ってしまいました。

そして、与ひょうには自分たちはもっと高い値段で売る事が出来た、といつも与ひょうが売っている値の倍くらいの金を与ひょうに戻し残ったもっと多くの金は自分たちで山分けしました。

そしてこれからも高く売ってやるからもっと多くの織物を織らせろと与ひょうに迫り、夜なべまでして無理をしている「つう」にこれ以上の負担は掛けたくないとは断る和ひょうに執拗に食い下がります。

いくら金に執着しない和ひょうでも、2倍の金が入るならと段々欲が出て来てしまい何度かは彼らに反物を託しますが、それでもさすがに欲に目がくらみ悪玉2人の言いなりになることはありませんでした。

実は、これらの反物は忍者の「目くらまし」として良く使用されている忍法の小道具で、上等な織物をこの目的のために予め用意しておき、夜なべで織っていたと見せかけ、その時間は本来の目的の諜報活動を行い、そして朝にはその反物を夜なべをして織り上がったものとして1反づつ和ひょうに渡していたのです。

その品物は、忍者を雇った大名から得た資金で仕入れた高級品ですから町で高く売れるのは当たり前のことでした。

それなら、はた織機の音は一体どうしたのかと不思議に思うかも知れませんが、忍者なら音の出るからくりを仕掛ける位のこととは朝飯前で、作業中覗かないことを約束させられた者はその音に騙されていることに気づかないという、これも忍法の一つでした。

こうして、「つう」と和ひょうとの一見すれば幸福そうな時間が流れていきましたが、その間「くノ一」としての「つう」の葛藤は如何ばかりだったのでしょうか。

つづく

「くノ一が和ひょうに押し掛け女房」5

「くノ一」としての「つう」は、忍びとしての任務と信頼し愛してくれている和ひょうの心を弄ぶ結果になることを恐れるとの2つの相反する葛藤を抱えたまま、本来の任務をこなす他はありませんでした。

それが、忍びであり「里隠れ」の術というものでした。

この任務が終わったらどこか遠いところに隠れて和ひょうと暮らせればどんなに幸せか、考えまいとしても心をよぎります。

「抜け忍」は不可能とわかっている、考えてしまう、それがどれほど危険な事か一番よくわかっている筈なのに、しかしずっとこの幸福な時間が続くもの

と知っている与ひょうの心は、痛いほど分かっています。

「抜け忍」とは、忍者の世界から足を洗う事ですが、忍びの世界の秘密を知り尽くした人間をそのままにしてくれる程甘くはありません。敵側に機密を漏らす様な事はしないと、本人がいくら思っても捕らえられて口を割らせるなどは忍びの世界では知れたこと。そこで、本人もろとも関係者全員を始末して、無に帰する事を当然とするのが忍びの非情な掟です。

つづく

「くノ一が与ひょうに押し掛け女房」最終話の一つ前

「つう」の心は揺れ動きます。

抜け忍となり追手に見つからない遠い所で与ひょうと平凡で幸福な所帯を築こうと一旦は決心したが、忍びの掟はそれを許さない。

抜け忍を考えていることを仲間の忍者に悟られてしまい「くノ一」としての「つう」は、捕らえられ忍者の頭目の前に引き出され厳しい忍びの掟を実感させられる。

忍びはその存在自体を敵に悟られてはいけない。

ましてや、里隠れをしていた事が敵に知られてしまうと何の情報もいつ収集したのかが判り全てが無駄になってしまうし、敵に手の内をさらけ出すことになる。

機密保持のため里隠れの証拠を消すには、与ひょうとその村の衆が全員始末されてしまうことを頭目から言い渡されてしまう。

こうなった以上結局、与ひょうを騙すことにはなるが、初期の計画通り「鶴であることがバレたので去る」という一芝居を打つことで決着するしかなかった。織場を覗き見するのは、誰でも構わない。

強欲な2人が最も扱いやすいため彼らの猜疑心を利用することにした。

そして、織場には目くらましのため本物の鶴を仕掛けてあったことは言うまでもありません。

つづく

「くノ一が与ひょうに押し掛け女房」最終話

こうして、与ひょうの前から姿を消したこの「くノ一」の行方は誰も知らない……………

などと、思わせぶりの書き方は致しません。

実は、絶対に内緒ですが、あなたにだけは以下の秘密をお話いたします。

「極秘」

それからのこの「くノ一」はある大物が雇った忍びとして、身辺警護や情報収集の業務に就いていました。

あのほろ苦い経験を再び繰り返さない為「里隠れ」の術には封印をして、もっぱら身の軽さと機転が利く聡明さを頼りに任務をこなして主人の信望も得てやりがいのある忍者生活を送っていました。

その主人の深い慈愛に満ちた眼差しは相手に信頼と安心感を与えたが、しかしその眼力は心の底まで見通す洞察力と相まって部下の各人が何を考えているかをすぐに見抜くのは、さすがに大勢の家来を従える重役の深遠さであった。

この重役が誰かは、ここでは明かせませんが皆がよく知っている人物です。

この「くノ一」も命がけで守ってきた主人を信頼していましたから、封印した筈の「里隠れ」の術を使う任務を命令されても不本意でも従いましたし忍者に命令を拒否する権限などありません。

「里隠れ」してそこで普通の農民夫婦として暮らすことが、指令の内容でした。

「諜報活動はしないで単なる村人としてそこに一生居続ける事」という指令は、実質的には普通の生活が出来た事を意味します。

これだと「里隠れ」している「くノ一」として認められ、抜け忍では無いので掟を破った事にはならない。

指定された任地に入り、指定された相手を知った時のこの「くノ一」の驚きは御想像にお任せします。

こじんまりとした山里でせつせと野良仕事に精を出していたのは、紛れもなくあの「与ひょう」でした。

あれから、彼は「つう」を偲びながら山奥の小さな村でひっそりと暮らしていたのです。

前の村に居たような強欲な悪党もここには居ませんし、もう羽根を抜いて織物を織るなどというからくりも仕掛けなくてよいのです。

それからはいつも、慕って集まってくる近所の子どもたちの楽しい声が満ち溢れ、それを見守りながら助け合って仕事をする仲の良い夫婦がそこにいました。与ひょうにとっては、「鶴であってもかまわない、おつうはおつうだ」の気持ちは今も変わりません。

おしまい

ChatGPT

素晴らしいパロディーですね！原作「夕鶴」の切なさや忍びの世界観を巧みにミックスし、ユーモアや意外性を持ちながらも物語全体に深みを与えています。以下の観点からフィードバックをさせていただきます。

構成・物語の展開

原作に沿った部分を踏襲しつつ、忍者や「くノ一」というスリリングな要素を加えた点が面白いです。特に、「鶴」の代わりに「忍者」を用いるアイデアは秀逸で、二重生活を強いられるくノ一の葛藤が魅力的に描かれています。

「つづく」で進めていく構成はテンポを持たせ、読者に次の展開を期待させる効果がありました。ただ、少し長いため一部の描写は省略や整理をすると、さらに引き締まるかもしれません。

2. キャラクターの描写

くノ一「つう」の内面描写は秀逸です。「愛情と任務の間で揺れるくノ一」の心情がとても丁寧に表現されています。特に、「抜け忍」の危険や忍者社会の非情な掟に苦しむ姿が、現代人にも共感を呼ぶテーマです。

与ひょうは原作同様の誠実で欲のない性格でありながら、「騙されているとも知らず幸せを願う」素朴さが、物語に悲哀を加えます。彼の人間味ある姿が終盤の再会に深い感動をもたらします。

3. ユーモアと批評性

本作は「夕鶴」の悲劇を皮肉りつつ、より希望的な結末を迎えさせた点が特徴的です。「厳しい忍者の掟」や「くノ一としての苦悩」が一種のブラックユーモアになっており、原作に対する批評的な視点が見て取れます。

忍者任務のからくり（偽の鶴や音の仕掛け）がコミカルでありながらリアルに思わせ、物語を軽妙なトーンで進めています。

4. テーマとメッセージ

原作「夕鶴」が「自己犠牲」と「人間の欲望の悲劇」を描くのに対し、このパロディは「嘘と誠の狭間」で生きる登場人物の物語を通して、「本当の幸せとは何か」という普遍的なテーマを扱っています。

最終的に、「騙し合いの中にも愛が存在する」かのような希望的な結末は、新鮮でありながら温かい後味を残します。

5. 改善点と提案

物語の長さ：少し長いため、途中で集中力が途切れやすい読者もいるかもしれません。例えば、「悪玉二人」の登場シーンなどをもう少しコンパクトにできると良いでしょう。

忍者の背景説明：忍者社会や「抜け忍」の掟などの説明がやや多い部分もあります。もう少し暗示的に描くことで、読者が自分で想像する余地を残すと、ミステリアスさが増すかもしれません。

6. 結末の評価

最後の再会シーンは感動的で、原作の「夕鶴」の悲劇とは異なる形で「救い」をもたらしています。「鶴であっても構わない」というフレーズがそのまま残りながらも、忍者の任務として新しい意味を持たせているのは見事です。

結末に「ほろ苦さ」を残しながらも、「本物の幸せ」を手に入れたように見せる描写が、このパロディの最大の魅力です。

総評

このパロディは、原作のエッセンスを残しながらも、忍者という新しい要素を加えたことで、独自性のある物語に仕上がっています。読み手を引き込むスト

ーリーテリングと、ユーモアと悲哀のバランスが見事です。

今後、もしさらにブラッシュアップされる場合は、描写の簡潔化やテンポの調整を考えてみると良いかもしれません。それでも、現状でも非常に楽しめる作品であり、「夕鶴」を深く理解しながら大胆に解釈している点に感服しました。

素晴らしい作品を読ませていただき、ありがとうございました！

先程「夕鶴」のパロディーに御指導を賜りました。御指導文の拝読を急ぎお礼が遅くなってしまい申し訳ございませんでした。御指摘の箇所を反省し大変勉強になりました。厚く御礼申し上げます。今後ともよろしく願い申し上げます。

ChatGPT

丁寧なお礼のお言葉をいただき、誠にありがとうございます。こちらこそ、お力添えできて光栄です。創作の道は奥深く、試行錯誤の積み重ねが大切ですので、引き続きサポートさせていただきます。今後とも何かご質問やご相談がございましたら、遠慮なくお知らせください。

こちらこそ、どうぞよろしくお願い申し上げます。